



関東から大学生と教員が石巻来訪

平成27年8月22日(土)、23日(日)の2日間、関東から宮城県に、川村学園女子大学、東洋学園大学、千葉商科大学、専修大学、慶應義塾大学の学生と教員17名が来訪しました。

東日本大震災からの復興支援と被災・復興に関する学習が主な目的です。学習の上でも経済効果の面でも、このような来訪は重要です。宮城県の石巻専修大学学生・教員もこれを歓迎し、一行に加わりました。

両日、一行は次の行程をたどりました。

◇22日

A 被災地視察(日和山等)

石巻専修大学から関東の一行へ被災地の状況の説明
門脇小学校保存をめぐる訪問者と住民の間の意識対立の問題の紹介

B 水産加工会社視察(㈱ヤマサコウショウ)

部長から震災時とその後の事業再建の様子の紹介。
冷蔵庫・作業場内部の視察。牛タン入りつくねや笹かまぼこなど買い物。

C 災害対応訓練(石巻専修大学)

災害対応についての論点について「ほえ〜るカフェ」方式で議論しました。よりよい防災訓練・避難訓練/災害の事実・教訓を次の災害まで記憶する工夫、自動車での避難をスムーズに行う方法、ボランティアの迷惑を減らす方法、支援物資による被災地の負担を減らすための方法、震災遺構を保存すべきか撤去すべきか、まちづくりの方向性、企業の復興の促進方法、孤立死を防ぐ法等。

体験としては、災害弱者(車椅子乗車、妊婦体験セット、手足の重し、目隠し、外国語放送)を想定した避難を試みました。

◇23日

D 仮設住宅での聞き取り・交流(渡波)

5グループに分かれ(各5名前後)、石巻、被災時の経験など聞き取り・交流。川村学園女子大学学生が仮設入居者に肩もみ・マッサージ

E 仮設住宅での昼食(渡波)

石巻専修大学生が食材調達。食事中、東洋学園大学ゼミ海外研修(ラオス、タイ)活動報告。仮設住宅の女性と女子大学生中心に調理。素麺、焼肉、石巻焼きそば、スイカ割り。

来訪学生が後日記した論作文を見ると、被災者の様子など、来てみてわかったことがいろいろあることがうかがえます。予想と印象を要約してお伝えします。

(1) 被災地についての来る前の予想

- ・少しでも仮設住宅の人達を楽しませる事が出来ればと考えていました。
- ・津波のことは思い出したくないのかと思っていた。
- ・津波の高さを知り、津波の恐ろしさを実感しました。
- ・仮設の方々は自分から津波のことを教えて下さった。
- ・BBQやそうめん作りのように、被災地の方々が楽しめるボランティアも良いことだと分かりました。
- ・活動を行う前は、被災した人々たち全員が地元での元の生活に戻ることを望んでいて、人々の間で交流もなく暗いイメージがあった。また、生活環境も整わず、不便な環境地であるのではないかと思っていた。
- ・復興は進んでいるのか、被災した方々の心のケアはしっかりとしているのかと考えました。違う所から来た私たちにどう接してくれるのか、期待も不安もありました。
- ・被災地の様子は同じ日本で起きているという実感がなく、また何もできないと思ってもどかしい気持ちでいました。ボランティア活動についてもどのような人たちがどんな活動をしているのか知りませんでした。
- ・いつ、どんなときに災害が起きても大丈夫のように平日頃からの防災は大切。実際に災害が起きたら生活は大変になると思います。すぐに元の生活に戻れるわけではないですがその時に自分が何をやるかは大切だと思います。被災地にできることや、ボランティアはたくさんあるので自分も役立つことができたらと思います。

(2) 被災地についての来た後での印象

- ・企業訪問、他大学の人と防災やボランティアについての意見交換、仮設住宅の人達とバーベキュー…とても貴重な2日間を過ごす事が出来ました。またこの様な交流をする機会があれば積極的に参加したいと思いました。
- ・ある程度復興は進んでいると思っていましたが、実際にはまだまだでした。仮設住宅の方はオリンピックも大事だか、こちらにも少しお金がほしいとおっしゃっていました。ボランティアや復興は続けるべきだと思います。
- ・復興作業が行われていたが、まだ更地の場所もあった。
- ・仮設の方「大変だったけど、仮設での生活を通して、周りの型と交流が増えたり…教えてもらったり支えあいながら生活していて、それが楽しくて今“幸せ”だよ」
- ・震災はないほうが良いが、震災を通して得たものもある。暗いイメージだけを持つのは違うと考えた。
- ・被災地に行くまで、被災地の方々とどう話そうか気をつけようと思っていたのですが、実際にお会いしてみるとこんな環境に絶対負けない、1日でも早く元に戻すという強い気持ちを持っている方が多くみられ、逆に私が元気やパワーをもらいました。
- ・被災地に行くことで震災の実感がわいてきました。また、ボランティアに行く私達の方がネガティブだったのに対し、話を聞くと「対自然に負けなくなかった。」「頑張ろうと周りと一緒に協力していくことが出来た。」と前向きな石巻の人たちに驚き、また私達も協力することや勇気等を感じ学べました。仮設住宅では、料理を一緒に作ることで仮設住宅の方々から教わる事が多く、最初は「やってあげたい。」という気持ち…途中からは、「学びたい、一緒に楽しみたい。」となりました。仮設の方の「石巻についてもっと知ってほしい。」という気持ちを受けとめたいと思いました。

新しい魚市場完成！

東日本大震災で被災し、現地再建が進められている石巻魚市場が9月1日から全面運用を始めました。秋漁に合わせてフル稼働を始めています。

新魚市場は鉄骨一部4階建てで、延べ床面積は4万7500平方メートルあります。東、中央、西・管理棟からなり、建物の延長880メートルは震災前の約1.4倍です。この長さは世界最大規模だそうです。

再建工事は2013年11月に始まり、東棟と中央棟東部が昨年8月、西・管理棟西部が今年3月に利用開始しました。

新施設は密閉式の荷さばき場などを整備し、高度衛生管理で消費者ニーズに応えているそうです。

完成を祝う式典は9月26日に開かれました。報道によれば、中川郁子農林水産大臣政務官、谷公一復興大臣補佐官はじめ、地元選出国會議員、村井嘉浩知事らも出席したとのことで、行政も力が入っています。

このとき、亀山紘市長は「世界に誇れる高度衛生管理型の魚市場が完成した」とあいさつしたそうです。市長は、10月にタイで石巻の水産物フェアが開かれることを紹介し、「国内外に誇れる石巻ブランドの構築を目指す」としたそうです。ブランドに夢を感じます。

このように新しい魚市場が完成することでまた一つ石巻に行ってみたいと思える場所が増えました。これからも魚市場は震災前よりいい魚市場を目指して欲しいと思います。石巻はこんなふうに頑張っていくという姿勢を魚市場の方々が先頭に立って見せることが復興支援をしてくれる方々への恩返しだと思います。

(大瀧裕也)

石巻 元気の証 川開き祭り

8月1日夜、石巻市の「第92回石巻川開き祭り」はいつもの通り、花火を打ち上げて終わりました。もちろん、東日本大震災からの復興の願いが込められています。

報道によると、午後7時半から旧北上川の中瀬で上げられた花火は計6000発だったそうです。今年から最大サイズが1段階アップした5号の花火は、上空に直径約150メートルの大きな花を咲かせるものだそうです。

報道によると、街中に集まった見物人は、県内外から約12万人（主催者発表）だったとのことです。宮城県内の花火師による復興祈願スターメインや5号16連発は、とくに注目を集めたようです。

花火大会は震災前、東北最大級の約1万6000発を市内陸部で打ち上げていました。旧北上川をまたいで市中と大学を結ぶ開北橋にナイアガラが仕掛けられていたそうです。震災の影響で2011年に会場が現在地が変わり、花火の数が減りました。

こういった祭りだけでなく、いろいろなイベントをもっと増やしていき、石巻をもっと活気付けていければいいと思います。さらに、そういったイベントなどがあれば私は積極的に参加し、現状を実感し理解したいと思います。そうすれば、復興への貢献ができるかもしれないと思います。

(阿部鷹介)

ツール・ド・東北2015

2013、14年に続いて今年も石巻でツール・ド・東北2015が行われました。このサイクリングイベントは、東日本大震災の復興支援および、震災の記憶を未来に残していくことを目的として、石巻市、女川町、南三陸町、気仙沼市を舞台として行われるイベントです。

今回の大会は、これまでの60km、100km、170km、220kmの4コースに加え、気仙沼市をスタートし石巻専修大学ゴールというコースを新設しました。前回までは上級者向けだった気仙沼や南三陸をより多くの人が走れることになりました。さらに募集人員を前回の3,000名から3,500名に増やし、より多くの人に現在の被災地の現状を見てもらい、東北のよさを感じてもらえるようになりました。

今大会からは東北の魅力の1つ「食」をテーマにした新企画「ツール・ド・東北 応“縁”飯」を実施しました。宮城県の海の幸を使用したメニューや岩手県一関市のいわて南牛を使用したオリジナルメニューを提供し、幅広くさまざまな形で東北を楽しむ企画でした。

ツール・ド・東北では、参加者やボランティアが民泊し、地域の方々との交流を深め地域の魅力を感じてもらい取り組みをしています。民泊によってライダーは低価格での宿泊が可能になるメリットがあります。また、民泊提供者も参加者と交流し、経済効果に恵まれます。

こうした取り組みによって、大会に参加した、あの人に会いたいという人が増え、経済効果と復興につながると思います。このようなイベントを続けて、人と人とのつながりを大切にすることが復興に必要なだと思います。

(涌井翔太)

支倉常長メモリアルパーク

慶長使節400年の節目を記念し、去る7月、私は支倉常長メモリアルパークに行ってきました。大郷町南西部の山奥のパークには、支倉常長と義弟支倉新右衛門常次のものとされるお墓があります。常長のものとされる墓は県内に3ヶ所あり、どれが本物かはわかりません。また、お墓により命日が異なるそうです。パークでは承応三年(1654)2月、享年84歳とされていました。

パークは以前、常長の屋敷があった場所とされています。常長は伊達政宗の命によりローマ教皇に親書を渡すためにイタリアやスペインに行き、キリシタンになった男です。帰国時の日本は禁教令が出されていました。政宗は、常長が処罰されないよう死んだと報告し、人目に触れないこの山林に常長をかくまったと考えられています。常長の死後は支倉別家で常長の義弟新右衛門家中の者が代々堅く世に秘して墓を守った、と記されていました。墓が大事にされていたことがよくわかりました。

パークにはおしゃれな街灯やベンチ、駐車場にトイレも完備されておりちょっとした休憩場所にもなっていました。お墓の横にはお墓参りした人が名前を書くメモ帳があり見てみると県外から来た方もたくさんいて人気を感じました。常長について学べるパネルもあり、全く知らない人でも理解を深めることのできる素晴らしい場所でした。

(高橋賢臣)